

エロシエンコ君を想う

十月も過ぎたが、エロ君はまだ帰ってこない。彼はもう帰ってこないのだろうか。もし帰ってくるなら、十月の末には北京に着けるだろう、と彼は言ったのだが、もう十月は過ぎてしまった。だが彼は出かける時に汽車の中でまた、もし帰らないのなら、フィンランドから電報で知らせるとも言ったのだが、今になっても電報はこない。

彼は北京にたった四か月いただけだが、とくに砂漠の寂しさを感じていた。われわれに欠けるのは、確かに心情の上での潤いである。しかしながら彼のような敏感な不幸な詩人でなければこのようにはっきりと感ずることはできない。というのはわれわれ自身はすでにサボテンのように乾燥枯槁には慣れきっているからである。エロ君は日本政府から追い出されたけれども、彼はやっぱり“日出ずる国、桜の国”日本に恋着しているのである。初夏のある日の午後、わたしは彼と東溝沿一帯をにこのような砂を踏みながら、柳の木陰を歩いていて、いつかまた日本に行ける機会があるだろうかと言ってみた。彼は日本は決して彼を入れないだろうと力説したが、わたしはそれによって却って彼の日本に対する恋慕をはっきりと読み取った。彼がこのように日本に恋着しているからには、当然長くは中原の平野に安住しておれないだろう。（これは趣味の問題であって、決して政治的な理由ではない。）

彼は世界主義者である、だが彼の郷愁はまた特に深い。彼はふだんロシア式の上着を着て、特にその故郷のウクライナ様式の刺繍のシャツがお気に入りであったのだが、——残念なことこの着物は敦賀の船上で盗まれてしまった。彼のトランクには、一日三度のシャワーの時に穿く、ビルマの筒型の白い袴が一本以外に、外国の着物はないと言ってよい。これ一つ取っても、彼が本当の“母なるロシア”の息子であることが想見できよう。彼は日本に対して、まさしく恋人の心情をもっている。だが失恋ののちは、母だけが最愛の人になったのだ。北京に来て、思わず帰国の機会を得て、忙しく飛び回ったのは、もともと当然の事だったのだ。何日か前にイギリスのダートレイ夫人から三つの書籍小包を受け取ったが、開いてみると七冊の神智学の雑誌で、『光明を送る者』(Ile Ljgntbrirnger) という名前だったが、点字で打ち出したものだった。エロ君が北京にいた時に注文したものであったのだが、送って来た時には、彼は行ってしまつて影も形もなかった。

エロ君は我が家に寄寓したが、双方ともとても自由で、何のわだかまりも感じなかった。わたしたちは彼を貴賓とはしなかったし、彼の方でもとても自然にわたしたちと交わり、しばらくするとどうして学んだのか甥たちの名前を覚え、ほとんど自分でも子どもたちと同輩の気分であった。わたしの弟の四つになる男の子はなかなかやんちゃな子で、いつもエロ君と遊んでいた。エロ君が彼のあだ名で“トブちゃんよ！”と言うと、彼の方も“エロチンコ君よ！”と返した。だがエロ君はこの名が全く気に入らず、いつも“あーあ、全く嫌んなっちゃう！”と嘆いていた。四ヶ月来そういう風には呼ばないので、“トブ君”はもうエロチンコ君という言葉を忘れ、しかも“眼のない人”に会ったことさえほとんど覚えていない始末である。

方々の友人がわたしに、エロ君は今どこかと訊くが、わたしは実際答えようがない。フィンラ

ンドにいるのか、ヨーロッパ・ロシアなのか、シベリアなのか、誰が知ろう。わたしたちはあてもなく彼の無事を祈るしかない。彼は北京を出てから一通も便りをよこさない。誰も彼のために手紙を書いてくれる人がないからなのか、あるいは彼は北京を出ると、すぐに北京を忘れてしまったからなのか、彼が日本を去ってからは、日本の友人とのやりとりも多くはなかった。——漂泊孤独の詩人は、君自身の悲哀さえ持て余しているのだろう。砂漠に住む人たちのせいで君の憂愁にそれ以上重荷をかけないよう願うばかりだ。十一月一日。

※初出：1922年11月7日『晨报副刊』